

開館後の1年間と今後の方針

—— 活動する博物館をめざして ——

熊 野 正 也

開館1年目の状況

昭和60年11月に装いも新たに考古学博物館が開館して以来、早や1年以上も経過してしまった。いままでと比較して入館者数は急激に増え、昭和61年度中の総入館者数を示せば約13,000名にものぼる。この数字は従来の2倍強にも比適するものである。小・中学生も見学に来る。本学の学生はもとより他大学生も多い。熟年層もいる。見学者層はこのように年令的にも、また研究者から素人まで、その巾は非常に広い。まさに、社会教育機関としての性格が色濃く現われてきつつ

附属博物館の性格

社会教育機関と 学内共同利用機関の二面性

あるとみてよい。いうまでもなく本館は大学附属博物館であり、その性格は「明治大学考古学博物館規程」（昭和56年5月18日制定、規程第74号）の第2条でめられているように、学内共同利用機関であるとともに社会教育機関でもある。したがって、巾広く社会一般に活用されるということは、本館の大きな目的の一つであり、喜ばしい現象とみるべきであろう。

展示ぬきの博物館はありえない。したがって、博物館にとっての展示は生命でもあるわけである。博物館＝展示と一般に受けとられてもまたやむを得ないところもある。しかし、展示はかならずしも博物館のすべてではないのである。「博物館法」（昭和26年12月1日、法律第285号）の第3条の博物館事業には、展示のほかいろいろな博物館資料の収集・保管、博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究、保管及び展示等に関する技術的研究、出版物の作成、講演会、講習会、映写会、研究会等の開催、他の博物館等との情報交換・相互貸借等、学校・図書館・研究所・公民館等の教育、学術又は文化に関する諸施設と協力し、その活動を援助したりすることなど事業の巾はきわめて広い。つまり、展示以外にもこのような事業がいろいろと存在し、これらの事業をそれぞれの博物館の性格に沿って実施してこそ、博物館といえるのである。

ところが、展示中心主義の博物館があまりにも多いことに気づく。もちろん、中にはすばらしい展示で好評を博している博物館もある。これにはかなりの費用と優秀な人材が揃っていなければならないことである。したがって、こういう博物館はごく稀である。一般の博物館はこういう訳けにはいかない。建物とか開館時の展示には多額の費用をかけるが、それ以降は全くかけない。人員関係にしてもしかり、当初は一応形の整えるだけの人員が配置されるが、それ以後は減少をたどる傾向が認められる。これでは頻繁に良い企画の展示のできないのは当然であろう。したがって、多くの博物館は、費用をそんなにかけない方法として「常設展」を選定することになる。常設展はほとんど動きがなく、そのために一度見学すると余ほど興味のある人でなければ、まず二度と見学には行かない。次第に入館者が減少してくるわけである。十分なる費用と学芸員を投入して展示に活気を与える以外は、入館者の減少をくい止める方法はないであろう。展示中心主義博物館の限界を知っておく必要があると思う。

明治大学考古学博物館はこの道を歩んではならない。開館時の新しい展示はめずらしさも加えて人を集めるだけの効果は確かにある。前述の入館者数はそれを物語るものであろう。本学の考古学博物館における展示の基本は、館報No.2でも述べてあるように、文学部考古学研究室の学問的な歩みを示すとともに、学界への貢献度の高さを示すものであって、いわば「学史的展示」ともいうべきものであった。したがって、展示の内容については他の博物館のまねのできないものであり、一つの大きな特徴ともいえる。しかし、展示技術、つまり見せ方については、年々古いものになって行くことはいなめない。一般の入館者はおそらく二度三度と足を運ぶことはないであろう。ことさらに宣伝にも力を入れているわけではないから新しい入館者も期待できない。当然、全体の入館者数の減少は、予想されるところである。

今後の博物館の 方向性

こういうことから考古学博物館は展示中心主義の立場から活発に博物館活動を行なえる博物館へと方向転換をはかり、事前に対応策を構じておかねばならないのである。しかも、本館の展示室の面積は $362.99m^2$ であり、他の博物館のそれと比較するとけっして大きくはない。むしろ小規模の展示室といってよい。したがって、展示中心主義といってもそこには自ら限界があろう。やはり、他の博物館活動で活路を見いだしてゆくべきであろう。

研究室と博物館 との連携

それでは展示以外の博物館活動とは何か。まず考古学博物館の実情から述べることにしよう。本館と文学部考古学研究室とは、切っても切れない密接な関係がある。例え、学内の組織上では博物館が学長直属の機関として位置づけられ、また、考古学研究室は文学部に位置づけられて一本化されていないとしても、博物館収蔵資料は、考古学研究室の発掘調査によって得られたものである。いわば考古学博物館は研究室で発掘調査した出土品や関連する実測図・写真等を保管し、そして活用を図るわけである。このパターンは本博物館創立当時の基本的な方針であり、今後もこれを堅持していかなければならないものと考えている。しかし、博物館は単に資料の保管施設であってはならないのである。保管した資料をいかに活用するかが博物館に与えられた大きな課題といってよいだろう。

考古学研究室は絶えず新しい考古学を求めなければならない。一方、博物館は保管資料を中心に再検討し、そこから新しい考古学を求めるべきである。研究室と博物館とはまさに車の両輪にたとえることができよう。両輪がふる活動することによって、明治大学考古学の特徴をさらに打出することができるものとする。しかし、車の両輪をめざすにはあまりにも博物館の体制が貧弱である。考古学研究室と異なり博物館は、組織で運営されるものであり、まず組織化の確立が先決である。現状は館長と専任職員2、嘱託職員3の6名体制である。入館者への受付・資料の貸出し・特別来客への応待・団体見学者への展示解説・予算の執行事務などほとんど日常業務に追われる毎日である。こういう状況であるから博物館における研究はおろか資料整理すらできないのである。一方、資料の貸出しは年々増加の一途をたどっており、現状の状態がこれからも続くとなれば、博物館としてのサービスすらできなくなるおそれが出てくる。憂慮すべきことである。そこで将来の博物館を考えるならば、まずもって今から博物館の組織づくりを第一の目標として取り組まなければならない。本学には考古学博物館のほかに刑事博

付属博物館3館 の関係

博物館・商品陳列館の3館があって、各々独自に運営されている。3館がそれぞれ独立して運営されているということは、それなりの特色を打出すためにむしろ好ましいあり方ともいえようが、しかし、その実体はきわめてむづかしい。なぜならば、3館共に絶対人員が不足しているからである。しかも、独立しているためにそれぞれが同様、もしくは同じような博物館業務を行わなければならないという無駄も数多くある。事務にしても専門的業務にしても中途半端な状態にある。

事務室の設置

これを一本化することによって、つまり3館共通の事務室を設置することによって、これらの無駄を省き、博物館における専門的業務を広げ、博物館としての使命を果していくことがもっとも効果的であると考えられるのである。いま3館の現有勢力は館長のほか嘱託を含めて10名である。これを分散型にするのではなく大きく一本化し、その中で事務担当と専門分野担当とに別ける方式こそは、現状を鑑みもっともふさわしい。例えば、事務室と学芸員室とに別け、それぞれの業務を責任もって分担することも一つの方法である。こういった組織づくり及び体制づくりがいま明治大学における付属博物館にとって急務である。そのうえで考古学博物館は、考古学研究室と車の両輪の関係で一翼を担っていけるものと確信するものである。

博物館活動の展 開

さて、博物館は、もっとも重要な要素ではあるが単に展示施設のみであってはならないということについて、すでに述べたところである。そして、いろいろな博物館活動を通じて、社会に還元しなければならないことも述べた。考古学博物館での具体的な活動とは何か。博物館には当然ながら考古学上の遺物、実測図、写真、標本、模型、フィルム、スライド、図書及び図表などの資料が存在する。そして、これらの資料を収集、整理、保存及び展示することが博物館の大きな役割の一つである。すなわち、この機能は博物館にとっての大きな特徴でもあるわけだが、はたしてそれらの資料は展示だけの活用にとどまっていいるものだろうか。とどまるべきではないし、またとどめさせてはならない。もっともっと広い活用を考えなければならないのである。

考古学では学生はもとより一般も、資料を単に見るだけでは何にも分からない。自分の手で直接資料に触って細く観察することが大切なことである。このことができる機関は博物館以外はないはずである。もちろん、この場合は資料の扱いを熟知していることが最低の条件である。こういった技術的なことは一般でも学びとることが可能であり、どしどし養成すべきであろう。この役割は博物館が率先して行うべきであると思う。

考古学博物館で 予定する各種の 事業

本館はいま次のような事業を考えている。一つは博物館公開講座である。春・秋の2回にわたって開催する予定である。講師は本学の教職員と地方で活躍している卒業生で構成する。内容は先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代に係るものとして、時と場合によっては奈良時代・平安時代も含める。テーマは各時代ごとに設定する。募集人員は会場との関連で150名前後とする。講座の基本的な形は、1講座につき5人の講師によって5講義を行う。講義の日時は一般のもっとも参加しやすい土曜日の午後とする。広報活動は新聞・ポスター・チラシ等で行う。考古学での新発見は現在、テレビ・ラジオ・新聞などで大きくとりあげられ多くの人びとから注目され、そして関心がもたれている。このような段階で

考古学に関する公開講座を開催することは、時宜を得たことであり、多くの参加者を予想することができる。さて、この講座は5人の講師によって5講義を行いこれをもって1講座とするが、この5人の講師の中にはかならず本学の教職員を入れ、講座の総合テーマに関する総論を担当してもらうことにする。そして、テーマに沿った分野の研究者である卒業生からの講師には、自分のもっとも得意とするところの内容を話していただき各論とする。一講座ごとにこれらの講義内容を収録し、遂次出版する。本講座は博物館事業の中心の一つに位置づけ、毎年継続して実施する。

考古学入門講座 の開設

考古学入門講座は一般を対象とする。いま、停年を迎えこれから自分は何を目標として生きていこうかと考えている人は少なくはないだろう。いわば生涯教育の問題である。祖先の生活を知り、これからの自分たちの生活を創造していくために考古学は重要な役割を果たす学問の一つである。まず正しい考古学を理解する必要がある。博物館には多量の実物資料が保管されている。完全な形のものもある。破片のものもある。これらの実物資料を最大限に活用できるのは博物館である。すなわち、自分でさわり、目で確かめることができるのである。この特性を活かしてこそ、この入門講座開設の意義が高まってくるのである。館長による特別講義、学芸員による実技指導（土器・石器等の実測方法、拓本墨のつくり方、採拓方法）、各時代の解説、遺跡の見学、発掘現場の見学等のカリキュラムを組み、これらを初級・中級・上級に分けて各級毎の修了後に修了証を発行する。この修了証はとりたてて権威があるわけではないが、生きがいの一つとして発行するものである。

小企画展の開催

博物館である以上、こういった講座のほかに企画展の開催を企画しなければならない。いまさというまでもなく全体の展示室はきわめて狭い。常設展示室と参考展示室との二部屋があるが原則的には、常設展示の方の展示替えは行わない。したがって、企画展を開催するとすれば参考展示室を使用せざるをえない。参考展示室は常設展示室よりさらに面積が狭い。そこで、公開講座に合せた企画展を考えた方が有効的である。例えば、先土器時代に関する公開講座の場合は、そのテーマに即した企画展を行う。つまり、この有機的な両者の活動は、さらに大きな効果をあげることが考えられるのである。

そのほかに博物館として実施してみたいもの、実施しなければならない事業がまだまだある。しかし、現在の博物館の体制では実施困難である。前述した活動をまず具体化させ、そして定着させることこそが本館にとってもっとも重要であると考えている。これからの活動を実施することこそが、本館のめざす活動する博物館の基本であると確信する。